

二〇二六年度（令和8年度）

横浜女子学院中学校

C入学試験問題

令和8年2月2日（午前）

国語

注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、25ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号	氏名
------	----

— 次の文章の――線①～④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違いを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

今年で戦後八十年を迎えるが、戦争の悲惨さは後世に語り継いでいかなければならぬものである。中でも沖縄では日米両軍による住民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられた。日本軍は沖縄を本土ボウエイの要として位置づけ、米軍の本土上陸を遅らせるために、待久戦に持ち込むことに決めた。長期戦となるにつれ、日本軍は兵力を補うために、沖縄県民を根こそぎ動員し、当時十代であつた学生をも戦場にかり出す決断をとつた。「沖縄師範学校女子部」^②と「沖縄県立第一高等女学校」^③からも生徒や教師の二百四十名が負傷者にヨリそうために動員され、半数以上の人々が戦死した。この二校が「ひめゆり」と呼ばれていたことから、戦後「ひめゆり学徒隊」^④と呼ばれ、戦争がいかにひどいものかを戦争を経験していない人々に伝える話として語り継がれている。

――次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。(字数制限のある問い合わせは、句読点や記号も1字に数えます。)

「古典力」という耳慣れない言葉をあえてタイトルに据えて世に訴えるのは、今この時代にこそ古典を活用する力が必要だと考えるからだ。

インターネットの発達により情報環境は激変した。私たちが日々接する情報量は増え続け、膨大な量の情報処理を仕事でも求められるようになってきている。

世界中の知識、情報にアクセスできる環境は整ってきた。しかし、一人ひとりの教養がたしかな充実したものになつて5きたか、ものごとの判断力は向上したか、生の不安を乗り越えて生き抜いていく強い精神力を身につけたかといえば、少々心もとない。

「検索すればあらゆる情報が引き出せる」という安心感は、ともすれば知を自分の身についたワザとして捉えにくくする。諸々の情報は自分の外側に膨大な水量の大河となつて流れしていく、その川の水(情報)を必要に応じてすぐつて使う。いらなくなれば川に戻す。これは大変便利だが、自らの精神の核を形成することにはなりにくい。

精神の核といえるものを自分の身のうちに形成するためには、出会いが必要だ。「この出会いがなければ今の自分はない」といえる出会いは、現実の生活においては実感しやすい。しかし、この質の出会いを本との関係で持つには、読む側の構えが求められる。便利に使い捨てできる情報と接するのとは異なる、こちらの体重をかけた読みの構えが出会いの質を高めする。

古今東西の名著とされる書物には、精神の核を形成してくれる力、生命力がある。しかし、その生命力は、堅い殻におおわれた種子のようなものだ。殻を破り、種子を土壤で育てる必要がある。その作業は A^① が折れるようだが、人生という長さで見るとコストパフォーマンスは、むしろいい。この精神の作業をなす力が古典力だ。

情報の新陳代謝の速度が急速に上がってきた現代において、古典はむしろ価値を増してきている。移り変わる表層の景色に目を奪われ、「自分は大丈夫なのか」と不安になり浮き足立つ。そんな時、百年、千年の時を超えて読み継がれてきた書物を読むことで、「ここに足場があつた」と自信を持つことができる。

絶対の真理などはないのかもしれない。しかし、かなりの程度「妥当」^{だとう}だと思える考え方はある。ニュートンの力学は、アインシュタインの相対性原理によって唯一無二の絶対性は失つたかもしれないが、妥当性は維持している。非ユークリッド幾何学にとってユークリッドの『原論』は古典だ。約二千五百年前の『論語』は人間の本性の変わらなさや持つべき心のあり方について、相当程度の妥当性をいまだに持ちつづけている。

古典を数多く自分のものとすることで、この「妥当性の足場」をたしかなものにしていくことができる。一つの古典でも、読み込み方が深ければ、この世を生き抜くための助言を、その中から数多く見つけることができる。素手で地中深くに埋まっている宝石をつかみとろうとする勇気と粘りに応じて、宝石の量は増す。

ここでは、一冊の本を深く読み、自分にとつての古典を持つための方法とともに、複数の、できれば五〇冊程度の古典を持つ方法を提案したい。というのは、精神のバランスこそが、人間にとつて、これから世界にとつて必要だと考えるから

だ。

グローバルに情報が行き交うようになつてはきたが、民族間、宗教間、国家間の緊張^{きんちょう}は必ずしも緩和^{かんわ}していない。価値観の多様性を受け容れる知性の力が、他者に対する寛容さとなる。

世界はこれから、他者理解に基づく寛容さの方向に行くのか、それとも理解を拒絶^{きょぜつ}した不寛容の方向に行くのか。この方向性を左右する重要な鍵^{かぎ}が古典力だと私は思う。

多様な価値観を理解し受容するには知性が求められる。数々の古典を自分のものとしていくことで、この知性が鍛えられる。自分の好き嫌いや快不快だけで判断せず、背景や事情を考え合わせ、相手の考えの本質をきちんと理解する。この深みのある思考力が知性だ。

古典を読むと、思考に深みが出てくる。骨太な思考力、想像力が古典の中には埋まっている。それをかみくだくように読み込んでいくと、読むこちらの思考も掘り下げられてくる。深い思考のテキスト（書物）は、思考の垂直的な深さの感覚を刺激^{しげき}してくれる。日常の思考は他愛もないことが多い。他愛もないことを語り合い、メールし合うのは人生の大切な楽しみではあるが、それが生活の大半を占めているのでは、深みのある思考力が育ちにくい。

古典は、その一つひとつが強烈な個性で屹立^{きつりつ}している。それぞれの古典は自分の足で立ち、自らがその思考の根拠^{こんきよ}となつていて。要するに、小手先の借り物では亞流^{きょうりゅう}でしかなく、時の審査^{しんさ}に耐えて「古典」と認められるのではない。

古典はみな本来強烈な個性で極彩色^{ごくいろ}に光輝いている。しかし、時が隔たつたり、著者の思考が深すぎたりして、現代の私たちの感覚からすると、むしろ地味に見えてしまいがちだ。しかし、これは錯覚^{さつかく}である。

近年の研究で、寺院の仏像や壁画の中には、実は極彩色であったものがあることが明らかにされた。CG（コンピュータ・グラフィック）で復元されたその様子は地味なものというより、日常では目にしないほど鮮やかな色で、極楽浄土への希望を感覚的に呼び起すものであつた。あるいは壯嚴^{そうごん}さで胸をかきたてる刺激的^{しげき}な存在であつた。

古典力は、この復元作用に似ている。ほこりをかぶつたように見える古典を現代のテキストとして読み直すことで、色が鮮やかに読みがえる。自分の問題に引きつけて古典の文章を読むことで距離^{きより}が縮まる。時の隔たりが一挙に縮まる感覚は、古典ならではの興奮だ。

現在日本では古典新訳ブームが起こっている。現代の感覚に合った訳で古典を読みやすく、という傾向^{けいこう}は、時代が古典を求めていることの表れだ。

日々情報にあふれかえり、早い速度で過ぎ去る日常の中で、「もつとたしかなものに触れて落ちつきたい」、「自分の抛りどころとなるものに出会いたい」という思いが、多くの人の胸に湧いているのだろう。その湧きあがる、不安とあこがれの入りまじつた思いを受け止めてくれるのが、古典だ。

二〇〇六年から新訳として出版された亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』が百万部を超える大ベストセラーになつたことに、私は大きな希望を感じた。すでに優れた訳が複数ある状況^{じょうきょう}で、世界最高の小説とされる長大な作品がミリオンセラーになるとは、ドストエフスキイも驚くであろう奇跡^{きせき}だ。長年の研究に基づいた優れた新訳によつて古典に現代の息吹^{いふき}が吹き込まれる。古典は何度も読みがえるのだ。

訳を複数読み比べることで、古典の姿がより明確になる。「この訳が自分にはぴったりだ」と思える訳に出会えた時の喜びは大きい。読み比べができる、充実した出版文化の現状に感謝しつつ、古典の不滅の生命力に改めて驚嘆する。^{ふめつ}^{きょうたん}

古典は、読者が一人で静かに向き合うことの多い相手ではあるが、研究者による手引きがある方がより深い理解に至りやすい。研究が進むと、古典に新たな解釈^{かいしゃく}が加わり、その古典の評価も変化する。百年以上高く評価されずに埋もれていた本が名著として見直され、古典の仲間入りをしていくケースは稀^{まれ}ではない。

古典に対して予備知識を持たずに、まっさらな状態で出会うのも、B意味はある。先入見を持たずに古典の原文そのものから受ける印象を素直に積み重ねていくことで、「自分の読み」を深めていくやり方もある。

C、実際には古典の名著の中には難解なものや現代的な解釈が必要なものが多いので、手引きとなる解説は基本的に有益だ。^{かたよ}_さ偏りを避けたい場合は、立場を異にする複数の解説を参考にすればいい。解説によっておよその内容理解を進めておいた上で、古典そのものの「味読」、文字通り味わいつつ読む段階に入るとストレスが少ない。

古文を味わう場合も、原文をいきなり読むのが敷居^{しきい}が高いのなら、現代語訳を先に読んで意味を把握^{はあく}した上で原文を味わう順序で読むと読み進めやすい。古文のテストではないのだから、無理をする必要はない。ある程度意味がわかつていた方が、落ちついて原文の良さを味わうことができる。私は小学生に古文を教えるときには先に現代語訳を言つてから、みんなで原文を音読することにしている。そのあと、「現代語訳と原文とどっちが好き?」と聞くと、全員が「もとの文章の方がいい」、「なんかかっこいい」と答える。子どもたちにも原文の魅力^{みりょく}はしっかりと伝わるのだ。

現代語訳は便利な手引きだが、音読したり、くり返し読み、覚えてしまう

ものとしては、古典そのものがふさわしい。古典には、古今東西の偉大な人々の肉声がこもっている。その肉声を聞きとるには、自分の体を通して読むのがいい。

古い書きことばであるのに、あるいは翻訳^{ほんやく}であるのに「肉声」という表現は、ピンとこない、という人もいるかもしれない。しかし実際に古典と呼ばれる名著に直接触れてみると、「肉声」と表現したくなる個性の強さを感じる。今そこにその偉大なる人間がいて、本質を心から心へと伝えようと尋常ならざるエネルギーをことばに込めていると感じてしまう。エネルギー量が並外れているので、時代を超えて「肉声」のように文が語りかけてくるのかもしれない。

この圧倒的なエネルギーを浴び、心身の奥にそのエネルギーを蓄積^{ちくせき}することが古典を読む大切な意義だ。意味の枝葉末節にとらわれず、エネルギーを感受する。思考の骨太な元型を学ぶ。感情の大きなうねり、パッションの燃えさかりに触れて、なにかしら生命力の火種が自分の中に生まれる。そんなエネルギーの伝播^{でんぱ}が、古典力の本質だ。

教養として古典に関する一通りの知識を持つておくと、いわば古典力の基礎^{じゆう}となる。古典のほこりを払い、あるいは解凍^{かいとう}して、内なる生命力をよみがえらせる。

（齋藤孝『古典力』より）

※1 非ユークリッド幾何学…ユークリッドの著した数学書を他の命題に置き換えて体系化した数学の一部門

※2 屹立…ゆるぎない様子

※3 亜流…一流の人間をするだけで、独創的でなく、劣つていること

問一 線「構え」(12行目)とあります、このか所の言い換えとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 判断 イ 良心 ウ 自信 エ 能力 オ 覚悟

問二 線①「Aが折れる」(16行目)とありますが、「苦労する」と同義の慣用表現になるように、最適な漢字1字を答えなさい。

問三 線②「この方向性を左右する重要な鍵が古典力だと私は思う」(33行目)とあるが、それはなぜですか。60字以内で説明しなさい。

問四 B (66行目)・C (68行目)に入る語の組み合わせとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア	B	それゆえ	C	ただし	イ	B	もちろん	C	しかし
ウ	B	じつは	C	ところが	エ	B	同様に	C	一方で
オ	B	とにかく	C	だが					

問五

——線③「敷居が高い」(71行目)とあります。このか所の意味として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア あまりに退屈であること イ ハードルが高いこと ウ 解決が難しいこと

エ お金がかかること オ 誰にでもこなせること

問六 ——線④「現代語訳」(76行目)とあります。ここで「現代語訳」の説明として、誤っているものを1つ選び、記号で答えなさい。

ア 複数の現代語訳を読み比べることは、古典作品をより鮮明に捉えることにつながる。

イ 原文を読む前に現代語訳を読むことは、古典作品を味わいやすくする。

ウ 異なる現代語訳を繰り返し読み、記憶にとどめることで、古典作品の魅力は伝わっていく。

エ 現代語訳に頼らず、原文から得られた理解によって「自分の読み」を深めることができる。

オ 現代語訳は原文のような「肉声」は感じないが、古典に親しむためには有用なものである。

問七

本文において筆者の述べている「古典力」とは何ですか。最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 常に流行が変化し繰り返す社会の中で、流行をつかむための知識がいかに重要かを気づかせてくれるもの。

イ 膨大な量の情報を処理しなければならない世の中において、本当に正しい情報が何かを最短で教えてくれるもの。

ウ 社会の在り方が激しく移り変わる今の時代において、これまでにない新しい生き方を提示してくれるもの。

エ 流動的な現代において、自分の立ち位置が不安になってしまふ私たちの心の拠りどころを形成してくれるもの。

オ 様々な情報が行き交う現代社会の中で、情報をどのように取捨選択すればよいかを提示してくれるもの。

問八 次の選択肢は本文において筆者が「古典」をどのように捉えているかを、食べ物で比喩したものです。表現として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア ラーメン イ ちくわ ウ ピーマン エ 納豆 オ さきいか

三　主人公の瑛介^{えいすけ}は持病で入院しています。本文は病院で友達になつた壮太^{そうた}が退院する場面からです。本文を読み、あとの問い合わせなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に數えます。)

昼ごはんを食べ終えて歯を磨いた後、壮太が母親と一緒にぼくの病室にやつてきた。壮太の母親は大きなバッグを持ち、壮太もリュックを背負つている。

「A」

壮太の母親は、ぼくとぼくのお母さんに頭を下げた。

「B」

ぼくのお母さんが言った。

「C」

「D」

お母さんたちがそんな話をしている横で、ぼくたちはお互い顔を見合させて、かといって今この短い時間で話す言葉も見

当たらず、ただなんとなく笑つた。

「行こうか。壮太」

母親に肩に手を置かれ、

「瑛ちゃん、じゃあな」

と壮太は言った。

「ああ、元気でな」

ぼくは手を振ふった。

壮太は、

「瑛ちゃんこそ元気で」

そう言つてくるりと背を向けると、そのまま部屋から出て行つた。

壮太たちがいなくなると、

「フロアの入り口まで見送ればよかつたのに。案外二人ともお別れは□E□しているんだね。ま、男の子つてそんなもんか」

とお母さんは言つた。

お母さんは何もわかつていない。あれ以上言葉を発したら、泣きそうだったからだ。きっと壮太も同じなのだと思う。もう一言、言葉を口にしたら、あと少しでも一緒にいたら、さよならができなくなりそうだった。口や目や鼻。いろんなところがじんと熱くなるのをこらえながら、ぼくは「まあね」と答えた。

壮太がいなくなつたプレイルームには行く気がせずに、午後は部屋で漫画まんがを読んだ。時々、壮太は本当に帰つたんだな、もう遊ぶことはないんだなと気づいて、□F□心に穴が空いていくようだつた。これ以上穴が広がつたらやばい。そう思つ

て、必死で漫画に入り込もうとした。

二時過ぎからは診察しんさつがあった。この前の採血の結果が知らされる。

「だいぶ血小板が増えてきたね」

先生は優しい笑顔をぼくに向けると、さもビッグニュースのように、「あと一週間か二週間で退院できそうかな」と言つた。

「よかったです。ありがとうございます」

お母さんは頭を下げた。声が震ふるえているのは本当に喜んでいるからだろう。

やつとゴールが見えてきた。ようやく外に出られる。それはうれしくてたまらない。だけど、どうしても確認かくにしたくて、
「一週間ですか？ 一週間ですか？」

とぼくは聞いた。

「そこは次回の検査結果を見てからかな」

先生はそう答えた。

「はあ」

「どつちにしても一、二週間で帰れると思うよ」

先生は、「よくがんばったからね」と褒めてくれた。

一、二週間。ひとくくりにしてもらつては困る。一週間と二週間では、七日間も違うのだ。七日後にここを出られるの 45

か、十四日間ここで過ごすのかは、まるで違う。ここで一日がどれほど長いのかを、壮太のいない時間の退屈さを、先生は知つてゐるのだろうか。ぼくら子どもにとつての一日を、大人の感覚で計算するのはやめてほしい。

お母さんは診察室を出た後も、何度も「よかつたね」と言つた。ぼくは間近に退院が迫つてゐるのに、時期があやふやなせいか、気分は晴れなかつた。明日退院できる。それなら手放しで喜べる。だけど、一週間か二週間、まだここで日々は続くのだ。

がつかりしながらも、病室に戻る途中に西棟の入り口が見えて、ぼくは自分が嫌になつた。何をぜいたく言つてゐるのだ。遅くとも一週間後にはここから出られるし、ここでだつて苦しい治療を受けているわけじゃない。西棟には、何ヶ月も入院している子だつているのだ。それを思うと、胸がめちゃくちゃになる。⁽²⁾ 病院の中では、自分の気持ちをどう動かすのが正解なのか、どんな感情を持つことが正しいのか、よくわからなくなつてしまふ。

就寝時間が近づいてくると、やつぱり気持ちが抑えきれなくなつてプレイルームに向かつた。真っ暗な中、音が出ない 55
ようマットに向かつておもちゃ箱をひつくり返す。⁽³⁾ 三つの大きな箱の中身をぶちまけるのだ。ただそれだけの行為が、ほくの気持ちを保つてくれた。悪いことだとはわかつてゐる。でも、こうでもしないと、ぼくの中身が崩れてしまいそうだつた。いつも、翌朝にはおもちゃは片付けられ、きれいにプレイルームは整えられている。きっと、お母さんか三園さんが直してくれているのだろう。それを思うと、ひどいことをしてゐよなど申し訳ない。だけど、何かしないと、おかしくなりそ

うで止められなかつた。

三つ目のおもちゃ箱をひつくり返し、あれ、と思つた。

布の箱から、がさつと何かが落ちた。硬いプラスチックのおもちゃの音とはちがう。暗い中、目を凝らしてみると、紙飛行機だ。

ぼくは慌てて電気をつけた。
あわ

壮太だ……。赤青黄緑銀金、いろんな色の折り紙で作った紙飛行機は、三十個以上はある。片手に管を刺して固定していたから、使いにくい手で折つたんだろう。形は不格好だ。それでも、紙飛行機には顔まで描かれていて、「おみそれ号」「チビチビ号」「瑛ちゃん号」「またね号」と名前まで付いている。

壮太は、知つていたんだ。ぼくが夜にプレイルームでおもちゃ箱をひつくり返していたことを。そして、壮太がいなくなつた後、ぼくがどう過ごせばいいかわからなくなることも。

明日から、一つ一つ飛ばそう。三十個の紙飛行機。これを飛ばしている間、少しは時間を忘れることができそうだ。

土日の病院はしんとしていた。週末は低身長の検査の子もいないし、三園さんも休みだし、看護師さんの数も少ない。

静まり返るつてこういうことだよな。ぼくは誰もいないプレイルームで紙飛行機を飛ばしたり、漫画を読んだりして過ごした。紙飛行機は似顔絵が書かれた「三園さん号」が一番よく飛んだ。

「なんだよ、壮太。瑛ちゃん号がよく飛ぶように作つてくれたらしいのにさ」

ぼくは一人でそう笑った。

結局、ぼくは一週間では退院できず、壮太のいない日々を紙飛行機と共に過ごした。

月曜日の朝には、四歳くらいの男の子が低身長の検査入院でやつてきた。母親の手を握って、不安そうにプレイルームに入ってくる。

「いろいろおもちゃあるよ」

ぼくが話しかけると、ほんの少しだけ解けた顔をしてくれたけど、まだ母親の手を離さないまま。

「そうだ、紙飛行機飛ばす？」

ぼくは箱いっぱいに詰め込んだ壮太作の紙飛行機を見せた。

「すごいね」

「だろう？ 全部、顔も名前もあるんだよ」

「これ、変な顔」

男の子はおみそれ号をつかんで、少し笑った。

「こつちは『ずっこけ号』。もっと変な顔してるだろう？」

「うん」

男の子は「飛ばしていい？」と母親に聞く。母親がお兄ちゃんに聞いてごらんと言う前に、

「一緒にやろうよ」

とぼくは男の子に言つた。

「じゃあ、ここからね。セーので飛ばそう」

「うん」

男の子が飛ばしたおみそれ号もぼくのずつこけ号も、ひよろひよろと少し飛んだだけでそのまま床に落ちた。

「だめだね！」

「本当だな。よし、じゃあ次、もっと飛びそうなの探そう」

ぼくが男の子と話していると、

「瑛介君、手紙來てるよ」

とプレイルームに入ってきた看護師さんに封筒を渡された。

「手紙？」

なんだろと封筒を見てみると、田波壮太と書かれている。ああ、壮太だ。名前を見ただけで壮太の顔と声が一気に頭の中によみがえつた。

ぼくは男の子に「好きなだけ遊んでいいよ」と紙飛行機の箱を渡すと、大急ぎで部屋に戻った。いつたい壮太は何を書いてきたのだろうか。早く読みたい、早く壮太の文字を見たいと封筒の中身を取り出して、ぼくは「うえ」と悲鳴を上げた。
④ 中からは、干からびた虫の死骸しがいが出てきた。茶色くなつてパリパリになつた死骸は、不気味でしかたない。おいおい、どんないやがらせだよと、手紙を読んでみる。

えいちゃんへ

2日間だつたけど、超楽しかったよな。ありがとう。また遊べたらなーってそなへばつかり考へてゐる。チビは最悪だけど、えいちゃんと会えたし、チビでもいいことあるなって思ったよ。

えいちゃん、「外はどれくらい暑いんだろ、うな」って言つてたけど、マジでやばいぜ。毎日たおれそう。昨日おれの家の前でバツタがひからびてたから送る。な。本当に丸こげになるだろ、う。

壮太

「ああ、壮太。ぼくもだ。もう一度遊べたらなってそなへつかり考へてゐる。病氣になつてよかつたことなど何もないけど、壮太と出会へたこと、それだけはラツキーだつた。

それにしても、外は本当にすごい暑さなんだ。干しエビみたいに干からびたバッタの死骸はかわいそうだけど、暑さはよくわかる。いくらテレビで映像を見ても、気温を知らされてもわからなかつたのに、このバッタを見て いるだけで、頭の上の汗が熱くなつて喉がカラカラになりそうだ。^{のど} ^⑤

ぼくはお母さんが帰つてくるのを待てず、看護師さんに言つて封筒と便箋をもらつた。壮太にすぐに伝えたいことがあつた。

壮太といふ間、何度も「小さくたつていいじやん」そう口にしようとした。遊びを考える天才で、みんなを笑わせることができる。壮太のその力は、背の低さなんて余裕で補えてるって思つてた。でも、壮太を傷つけたらと不安で、言えなかつ

た。

だけど、壮太は病院にいるぼくに、この夏の暑さを伝えることができる。いなくなつた後も、プレイルームのぼくたちを楽しませることができる。壮太はとにかく最高なんだ。壮太が壮太なら、小さくたつていい。そう。小さくたつて全然いいのだ。

干からびたバッタを横に置いて、ぼくはベッドの上の小さな机の上で手紙を書いた。

これ以上ない暑い夏が、今、始まろうとしている。

（瀬尾まいこ 『夏の体温』 より）

問一 A (3行目) → D (8行目) に入るセリフの組み合わせとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

(1) ああ、退院ですね。お疲れさまでした

(2) 瑛介君に仲良く遊んでもらって、入院中、本当に楽しかったみたいで

(3) いろいろお世話になりました

(4) うちもです。壮太君が来てくれてよかったです

- | | | | | |
|---|---|---|---|--|
| エ | ウ | イ | ア | |
| A | |
| (3) | (3) | (1) | (1) | |
| | | | | |
| | | | | |
| B | B | B | B | |
| (1) | (1) | (3) | (4) | |
| | | | | |
| | | | | |
| C | C | C | C | |
| (2) | (4) | (4) | (3) | |
| | | | | |
| | | | | |
| D | D | D | D | |
| (4) | (2) | (2) | (2) | |

問二 E (21行目) • F (28行目) に入る語の組み合わせとして最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| オ | エ | ウ | イ | ア |
| E |
| のつそり | あつさり | ゆつたり | きつぱり | さつぱり |
| | | | | |
| F | F | F | F | F |
| しつかり | ぼっかり | はつかり | きりきり | じっくり |

問三 ——線①「一週間ですか？二週間ですか？」（38行目）と瑛介が聞いたのはなぜですか。その理由として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 病院で過ごす七日間の差はあまりに大きいに、壮太も退院してしまったから。

イ 子供にとつての一日の長さを病院の先生に理解してもらう必要があると思ったから。

ウ これまで支えてくれたお母さんを、少しでも早く看病から解放させてあげたいと思ったから。

エ 壮太との思い出が忘れられず、共に過ごした病院に長く留まりたかったから。

オ 入院の期間によつて苦手な採血の回数が変わるため、できるだけ早い退院を願つてゐるから。

問四 —— 線②「胸がめちゃくちゃになる」（53行目）とあります、この時の瑛介の心情の説明として最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 入院生活は大人が考へてはいるよりも壮絶なもので、子供の瑛介にとつては七日間の違ひが気持ちを狂わせている。

イ 残りの入院が一週間なのか二週間かをはつきりしてほしかったのに、あやふやな答えしか返つてこず、怒りをあらわにしている。

ウ 病院での壮太との時間はかけがえのないものであり、これからも入院することを望んでいる自分を受け入れられずにいる。

エ 何か月も入院している子たちに對して、自分はあと一、二週間で退院することを申し訳なく思い、罪悪感をもつてゐる。

オ 退院が迫つてゐるにもかかわらず、七日間の誤差でがっかりしている気持ちをどうしていいかわからなくなつている。

問五 —— 線③「おもちゃ箱をひっくり返す」（56行目）とありますが、この時の瑛介はなぜこのような行動をとつたのですか。次の空らんに当てはまるように文中のことばを使って50字以内で書きなさい。

・退院の時期も不明確なうえに、（ ）

問六 ——線④「中からは、干からびた虫の死骸が出てきた」（105行目）とあります、壮太はどのような気持ちで手紙に

同封したのですか。最適なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 瑛介がいたことで、楽しい時間を過ごすことができたことへのお礼の気持ち

イ 瑛介が入院していることで面白いことがないと思い、瑛介を少しでも楽しませようとする気持ち

ウ 入院していて外に出ることのできない瑛介に、外の暑さを教えてあげたいと思う気持ち

エ 入院中に瑛介からチビと言われたことを恨んでおり、それに対する仕返しの気持ち

オ 自分の作った紙飛行機を変だと言つたことに対する仕返しをしようとする気持ち

問七 次の会話文は、壮太が瑛介に送った手紙について話しているものです。会話文を読み、Aさん～Dさんの中で誤った意見を述べている人を1人選び、記号で答えなさい。

Aさん：「私は、壮太の手紙が引用されることで壮太の感情や状況が明確に伝わり、読者がその場の雰囲気を直接感じ取れると思います。」

Bさん：「なるほど、手紙はもともと個人的なものなので、引用されると壮太の思いを瑛介に特別な形で届けられると思います。つまり、瑛介は壮太から信頼を受けているような気持ちになるのではないか。」

Cさん：「ええ、私も賛成です。他には、壮太と瑛介が物理的に離れていることを示す材料になると思います。二人の距離が離れていなければ、書いた手紙を引用する意味はないと思うので。」

Dさん：「たしかにそうですね。私は手紙を引用すると内容が抽象的になり、逆に読者が文章の意図をつかみにくくなると思いました。」

問八 線⑤「そうだ」（17行目）とあります。この語と同じ意味を表しているものとして最適なものを次より選び、

記号で答えなさい。

ア 雨が降るそうだ

イ 電車に乗り遅れてかわいそうだ

ウ そろそろバスが来るそうだ

エ 彼は相変わらず元気そうだ

オ 本当に何も知らないそうだ

問九

本文では瑛介が壮太にしかない長所をあげています。あなたの考える自分の長所とそれをどのような場面で発揮できるのかを100字以内で書きなさい。

